

家族から
昨日のように思われるあの頃

森山 晏子

横浜に引き揚げて来た日は、札幌から雪を連れてきたのではないの？と言われたほどの大雪でした。1986年3月20日のことです。

しかし暖かさは札幌とは比べ物にならず、程なく消えた雪に、これで思いっきり歩いて元気になってもらえると喜びました。何よりも家族みんなが揃ったのでほっとしたのです。

毎日が日曜日になった退院後は、ひたすら回復を祈りながら無我夢中に過ごしましたが、夫も好意ある保健師さんのお勧めに従い、やがて障害者の仲間と共に会を作り、積極的に楽しいことを計画して活動をはじめました。

私は、事務局を引き受けた夫のお手伝いをしながら10年間過ごしましたが、たくましく、明るく、今まで感じた事の無い皆様の力はとても魅力的でした。

「毎日出かけてゆく場所があったら、そこへ行けば誰かに会う事が出来て寂しくならないし、張り合いが出来るのではないか」と言う意見が出て、私も市の福祉関係機関に相談にまいりました。

当時スエーデンで始まった障害者の人権運動が世界的な拡がりを持ち、日本でも1983年から10年間（1992年まで）は「国際障害者の年」と定めて障害者の人権に目が向けられるようになっていたのです。倒れた時は、正に国際障害者年の最中でしたので一縷の期待を持っていました。

でもその意識は、理想であっても実現には程遠く、「どの様な障害でも一律に考えられ」障害者の意見を聞くのではなく、福祉とは、「健康な人が管理して与える制度である」といわれたのには、愕然としました。

何時も「なんとかなるさ」とのんきに構えていた私には急に鉄の扉を「ぱたん」と締められた思いがしました。

リハビリテーションとは何なのだろう？障害があっても生きていく限り人権は守られなければならない。

私たちは、人生の途中で障害を得た方々と共に、私たちが「元気に豊かな生き方、を考えてゆけば良いのだ」と思いついたとき、ぼっと灯火が点った気がしました。その切っ掛けになったのが、私共の出版記念会なのですが、障害者になってもまだ残存能力はあることに気が付き、夫はお仲間と一緒に翻訳の仕事を完成し、そして皆様とともに片マヒ自立研究会を立ち上げたのでした。（1991年）

個人の生活範囲から、

○心のリハビリ。

○再発しないための工夫。

○社会に出て行くためのバリアーについては、街づくり等に関係のある行政の方をお招きして計画を聞き、要望を聞いていただくなど。

東急の桜木町にエレベーターが付いた時は嬉しくて乗りに行ったこともあります。

○復職の希望を持っている方の為には、経験者のお話やアドバイス、又その関係者に復職状況や心得など、教えて頂きました。

○また余り知られていなかった福祉サービスについても調べ、少しでも生活の不便さを緩和させる方法をお知らせしました。取り上げられた問題は、会員の方の提案、要望にもとづいて決められたので本当に多岐にわたっています。そして、この時々の議事は、テーブルに取り「元気〇号」として

まとめ、会員の方や関係のあるところへお送りしました。

私共も、著書やこの会の存在を通じて、全国からお手紙や電話の問い合わせを頂くようになりました。

夫の講演活動は全国に広がり、障害者のリハビリ教室、大学・大学院での講義、行政の委員会にも出席するなど、忙しくも張り合いのある楽しい日々を感謝しました。

現在は地域の方にも広く知って頂くために、住みよい地域づくりに協力したり、更に区民会議のメンバーとして福祉部会長を務めています。私も、夫の活動に付いて行きサポートしているうちに介護者の立場を語り、ついには、区内の介護者の会を立ち上げる事になり（1996年）、今年で満10年になりました。

突然、思ってもみなかった障害に見舞われた時には、家族をも含めて閉鎖的で内向的になり、抜け道など皆無にも見えるものです。でも不思議に眼を外に向けて一歩踏み出す勇気があったら、明るい道が探し出せる事に気付いて欲しいのです。

家族も恥ずかしい、などと閉じ籠るのではなく、共に歩く姿勢で外へ目を向けてくださったら、どんなに幸せでしょう。

家族の支え方は色々ですが、とても大きな力なのです。共倒れにならないように、手抜きも、息抜きも、上手に取り込んで、賢く息長く、ご自分も大事にして欲しいですね。共に生きるために。

福祉に対する社会の感覚は、ここ数年の間に随分変わり、障害者の意見も受け入れられるようになって来ています。これからは、もっと暮らしやすく良い社会になってゆく事と信じています。

この会は、私共が悩んだ日のように、社会復帰を真剣に考え模索している方が、挫けることなく、その方向性を見つけ、力を得て、社会の中でいきいきと暮らしてくだ

さる事が目標だと思っています。お元気になるれ、出席されなくなった方のご活躍振りを、陰にでもお聞きするときはとても嬉しく喜んでいます。

これからも政治的な大きな権力、私欲に利用される事無く、健全な活動をして行きたいと思います。

最近は看護職の方や大学の研究者にも参加希望があり、障害者の社会参加を積極的に働きかけていく意識改革もなされて来ています。病院から社会復帰までの一連のサポート体制が出来るようになると良いですね。

一方、超高齢社会を迎えました現在、障害者が欲しいと思う環境はそのまま高齢者にも優しい環境でもあります。私たちが声を上げてきたこの環境作り、街作りは、奇しくも高齢者を理解して行く大切な感覚であり、先駆けの有意義な活動であったのだと少し嬉しく思っています。

それと同時に、少子社会を考える時、高齢者も介護予防を心がけて、積極的に社会に参加し、健康な高齢者になることが望まれるでしょう。障害を持って、自立していきいきと生きようというこの研究会の活動方針は、これからの高齢者にとって、とても大事な考え方なのだと思います。

あれから15年、遥かに見えました100回目の記念すべき研究会を今年迎える程になりました。会員皆様のお力の強さ、そして支えて頂きました沢山の方々の温かさは、大きな愛の賜物として有り難く深く感謝しています。また、共に励ましあって来ながら、この日を迎えることなく故人となられた方には、感謝と喜びの報告をしたいとしみじみ思います。